

V きょう土を開く

1 かんがい用水をつくった人びと

(1) 土田ぜき

保科正之は、1643年から1669年までの26年間、会津の大名でした。

正之は、猪苗代を大へん気にしていました。1672年8月、猪苗代の見祢山で湖や山をながめながら「わたしが死んだら、この見祢山にほうむってくれ、そして磐梯神社の末社としてくれ」と家来にゆい言をのこし、その年の12月になりました。

正之のひつぎは、1673年3月27日、正之の子正経によって見祢山にほうむられました。

正経は、正之を見祢山にほうむったので、その霊を祭る神社をつくろうと考え、家老であった友松勘十郎氏興にその仕事をまかせました。

友松勘十郎氏興は、正之にみとめられ、40才で家老になった人です。

氏興は、反対する幕府に、神式で祭ることをなっとくいくよう説明し、正之を見祢山にほうむり土津神社をつくりました。その神社を、大名がかわっても長く守っていくためには、村をつくり田をつ



土津神社（見祢山）



土津神社墳鎮石（見祢山）